

# 金原遺跡探訪ツアー

平成10年 9月 6日(日)

----- 見て・聞いて・語り合つて金原遺跡体感 -----

郷土資料館では、平成16年の埼玉国体アーチェリー会場となる(仮称)金原運動公園の建設に伴い、平成8年10月から11月にかけての2か月と、平成9年3月から現在に至る17か月にわたって、金原遺跡と金原前遺跡の発掘調査を行っています。

現在までに総面積の約2/3の発掘が終了し、先土器時代から縄文時代にかけての遺構や、土器、石器が数多く発見されました。

そこで、金原遺跡を通して、私たちの先祖が残した貴重な歴史的遺産に関する関心や理解を深めていただくために今回のツアーを企画しました。

この機会に長い間土の中に眠っていた縄文人の暮らしの一端に触れてみませんか？

# 日程表

時間		場所
9:45	宮代町役場集合	宮代町役場
⋮	バスで金原遺跡へ移動	
10:00	現地説明会	金原遺跡
11:20		
⋮	バスで郷土資料館へ移動	
11:30	企画展『遺跡からのメッセージ』 の展示説明会	郷土資料館 ロビー (特別展示室)
12:15		
	昼食 (各自持参)	郷土資料館 (旧進修館)
13:00	遺跡セミナー	郷土資料館 会議室
14:20		
⋮	バスで宮代町役場へ移動	
14:30	解散	宮代町役場

**\* 現地説明会 「時を超えて遺跡体験  
～金原遺跡現地見学会～」**

屋外の発掘調査現場では縄文時代の住居跡等を見学します。

また発掘事務所1階では、出土遺物や写真等が展示されていて、間近で見ることができます。

※現地見学会のみの方と合流して、4班に分かれて見学します。到着後、現地係員がご案内します。

**\* 企画展 『遺跡からのメッセージ～金原遺跡最新出土品展Ⅱ』**

金原遺跡で出土された、主な土器や石器が展示してあります。

当時の状況がより分かりやすいように展示されています。

(展示期間 8月13日～10月25日)

**\* 遺跡セミナー 「金原遺跡とその時代～全国の  
発掘調査事例から～」**

講師 鈴木敏昭氏 (熊谷市教育委員会 宮代町史監修者)

金原遺跡をより多面的に見ていただくため、全国の発掘事例をモデルとして、縄文時代後期の生活や文化について講演していただきます。



企画展

# 遺跡からの メッセージ

金原遺跡最新出土品展Ⅱ

8/13



10/25

宮代町郷土資料館

## 開催にあたって

金原前遺跡と金原遺跡は平成16年の埼玉国体アーチェリー会場の（仮称）金原運動公園の建設に伴い平成8年10月から11月にかけての2か月間と平成9年3月から現在に至る17ヶ月間に渡り発掘調査が行われています。現在までに総面積の2/3にあたる22,000m<sup>2</sup>が終了し、先土器時代から縄文時代にかけての石器の製作場の跡や縄文時代の住居跡、屋外で煮炊きを行った炉穴、胎盤を収納したといわれる埋甕、食物を貯蔵した穴（土坑）などが多数発見されました。

特に、金原遺跡では、縄文時代後期（約3,500年前）の18軒の住居跡が谷を囲むように弧状にならび、その周辺に貯蔵穴などの土坑がならぶというムラの様子が次第に明らかになってきました。

そこで、「遺跡からのメッセージ～金原遺跡最新出土品展Ⅱ～」と題して、金原遺跡ならびに金原前遺跡に住んでいた先土器時代の人々、そして縄文人たちからのメッセージの扉を開いてみたいと思います。9月6日（日）には縄文時代のムラの様子を知ることができる遺跡セミナーや金原遺跡の現地見学会も予定されております。この機会に長いあいだ土の中に眠っていた縄文人のくらしの一端に触れてみませんか。

この展示を通じて私たちの先祖が残した貴重な歴史的遺産に対する関心や理解を少しでも深めていただくことが出来れば幸いに存じます。

## 目次

開催にあたって	1
目次	2
凡例	2
金原遺跡の位置と環境	3
先土器時代の金原遺跡	4
金原遺跡で発掘された土器	5
発掘された縄文時代のムラ	6
発見された縄文時代の道具	9
参考文献	13
復元 金原遺跡の縄文ムラ	14
金原遺跡・金原前遺跡全測図	15
新聞から見る金原遺跡	16
催し物のご案内	18
金原遺跡へのアクセス	18

## 凡例

1. 本書は、平成 10 年度第 3 回企画展「遺跡からのメッセージ～金原遺跡最新出土品展Ⅱ」（平成 10 年 8 月 13 日～10 月 25 日）の展示解説パンフレットです。
2. 今回の展示は、現在発掘調査中の資料を扱ったため、今後の調査によって変わることがあります。
3. 本企画展の企画・構成、本書の執筆等は当館職員等の協力等の下、金原遺跡調査員河井伸一、石津薫が行いました。なお、イラストは今村佐和子が作成しました。

## 金原遺跡の位置と周辺環境

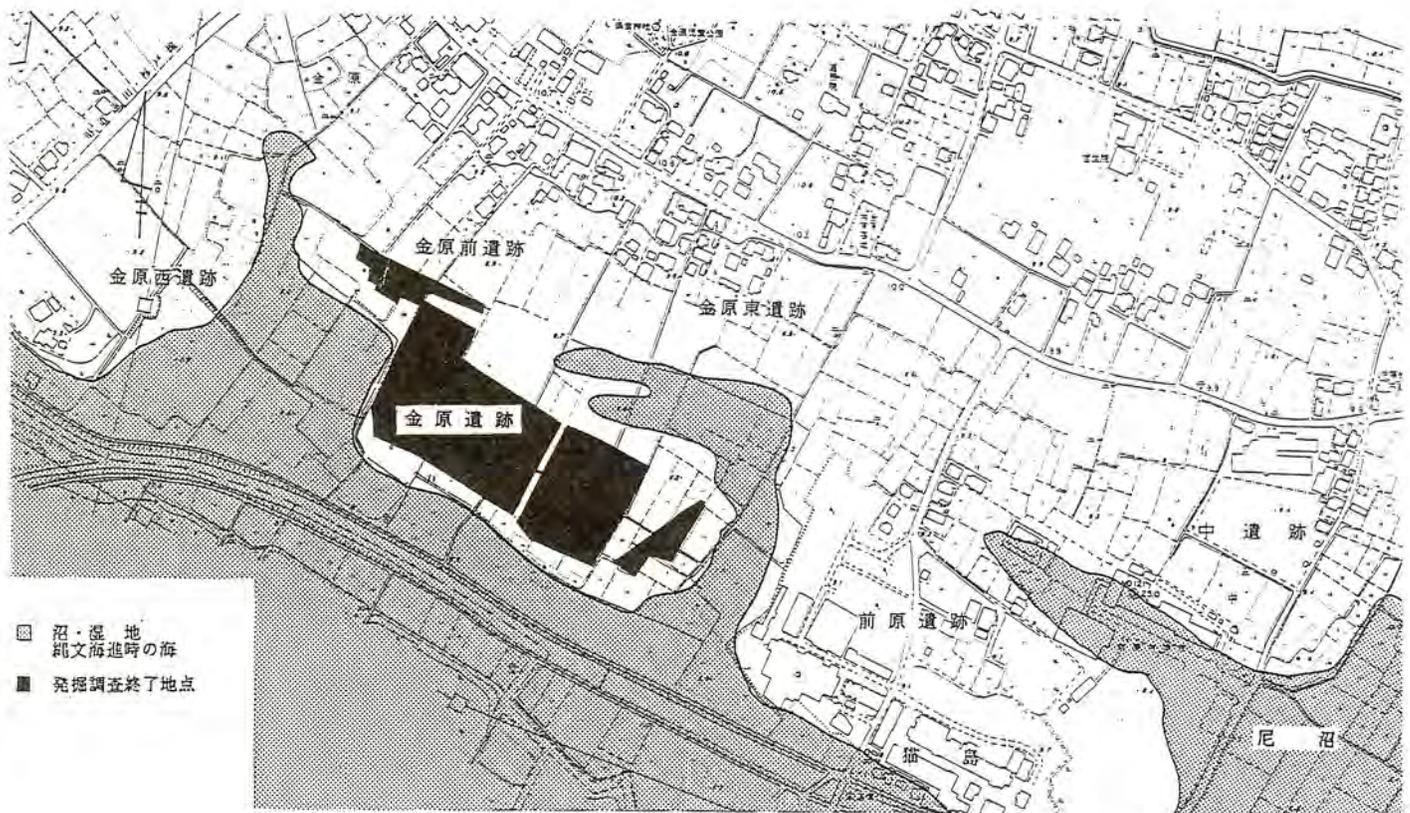
金原遺跡は、宮代町の南部に位置し、南は<sup>はやとほりかわ</sup>単人堀川をはさんで春日部市と白岡町と接しており、東武動物公園駅から南へ約3kmのところにあります。

地形的には慈恩寺台地の一支台にある南へ島状に突き出した台地にあり、三方を低地(水田)に囲まれています。この低地はかつては10m以上の深い谷となっており、縄文時代前期(約6,000年前)には海が広がっていたことが明らかとなっています。以前、西側の水田を約5m程掘り起こしたところ、貝殻が多量に出土したことから海だった様子が伺えます。当時は遠く群馬県館林付近まで海が入り込んでいました。

縄文時代後期(約3,500年前)頃になると、宮代・春日部付近までしだいに海も後退し、その後、沼地となりました。前原地区に残る<sup>あまぬま</sup>の尼沼などの小字からもそうした様子が伺われます。さらに、江戸時代に行なわれた新田開発により、沼地は水田に生まれ変わりました。

金原遺跡の周辺には金原西遺跡、金原前遺跡、金原東遺跡、<sup>まえはら</sup>前原遺跡、<sup>なか</sup>中遺跡などがありますが、今回の発掘調査によって金原前遺跡と金原遺跡が一つの遺跡として縄文時代のムラであったことが明らかとなりました。

海の幸、山の幸が周囲に広がる金原遺跡は、先土器時代から人々が住む環境に恵まれたところであったのです。



金原遺跡周辺図

## 先土器時代の金原遺跡

金原遺跡に人々が住み始めたのは今から約 14,000 年前のことです。この頃は、浅間山などの火山活動が活発で、多量の火山灰が降り積もりました。これが「赤土」すなわち関東ローム層と呼ばれる土です。この「赤土」の中から当時の人々が使った道具が発見されています。金原遺跡では、約 14,000 年前のナイフ形石器や約 13,000 年前の細石刃と呼ばれる縦長の剥片石器を作った跡が 1 か所確認されました。この製作跡からは、約 30 点もの細石刃が出土しました。これは、埼玉県東部地区に広がる大宮台地では町内の逆井遺跡に続く 2 例目の貴重な発見です。

### ナイフ形石器

現在まで 5 点のナイフ形石器が出土しています。この石器は縦長の剥片の鋭利な一边を刃部としてナイフ形に作り出されたものです。一般的に皮を剥いたり槍の先に付けたものといわれています。

金原遺跡で出土したナイフ形石器は黒曜石とチャートと呼ばれる石材を用いて作られています。こうした石材は宮代町付近ではありませんので、ほかの地域からはるばる運ばれてきたと思われる。



ナイフ形石器



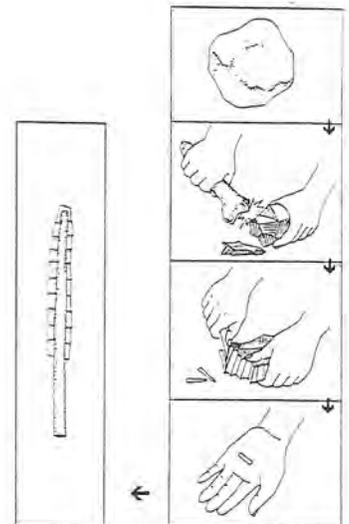
細石刃

### 細石刃

細石刃の製作跡から約 30 点もの細石刃が出土しました。この石器は約 3cm 内外の小型の剥片を利用した石器で木や鹿の角・骨などの軸の両側縁に 10 数個はめ込み使用されました。今日でいう「包丁」的な道具として使われたようです。

### 搔器(スクレイパー)

石の剥片などの一端を加工した石器です。木を削ったり、皮をなめすなどに使われたと考えられています。



細石刃の作り方

## 金原遺跡で発掘された土器

金原遺跡では縄文時代早期(約 8,000 年前)から縄文時代後期(約 3,500 年前)にかけての様々な模様をした土器が出土しています。

約 8,000 年前の土器は撚った縄を木の棒などに巻き付け模様を付けました。隣の前原遺跡では住居跡が発掘されています。しかし、金原遺跡では土器の出土はありませんが住居跡はまだ発掘されていません。出土した場所は台地東側の前原遺跡対岸ですので前原遺跡と関係があると推定されます。

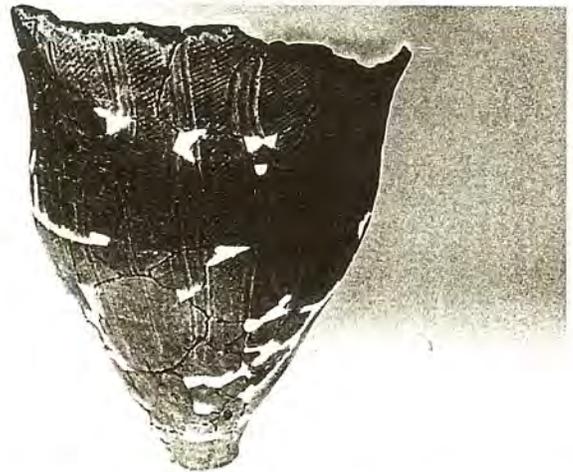
約 7,000 年前になると金原遺跡でも縄文人が生活をした住居跡や屋外で煮炊きを行った炉穴ろあなが発掘されています。この頃の土器はハイガイなどの貝殻の表面を使い土器の内外面を整形し、胎土しよくぼつせんいに植物繊維を多量に含みます。金原遺跡では台地南側のやや標高が高い所で集中して見つかっています。

約 4,000 年前になると土器の厚みが増し、模様も派手になります。金原前遺跡では2軒の住居跡が発掘され多数の土器が出土しましたが、金原遺跡ではあまり出土していません。

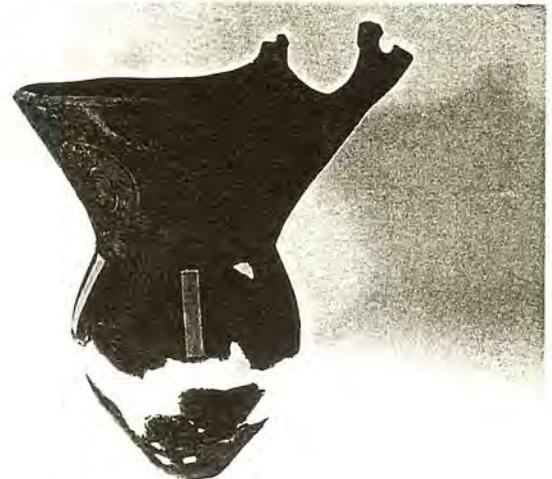
約 3,500 年前になると金原遺跡で最もムラが大きかった時期で多量の土器が出土しています。この頃の土器は、竹や木などの棒状の工具で模様を描きます。また、その沈線間に縄紐なひなひで縄文を施す土器もあります。台地西側の住居跡や貯蔵穴などの土坑どこう、掘立柱建物跡ほったてはしらたてものあとなどが集中する地点から多量に出土しています。金原遺跡出土土器の内、約8割がこの時期のものです。



約 7,000 年前の土器 (逆井遺跡出土)



約 4,000 年前の土器 (金原前遺跡 4 号住居跡出土)



約 3,500 年前の土器 (金原遺跡 226 号土坑)

## 発掘された縄文時代のムラ

金原前遺跡と金原遺跡では、<sup>たてあなじゅうきょあと</sup> 竪穴住居跡や<sup>たてあなじょういこう</sup> 竪穴状遺構、<sup>ほうけいちゅうけつれつ</sup> 方形柱穴列など住居関連の遺構が 25 軒、貯蔵穴や土器を廃棄した穴などの<sup>どこう</sup> 土坑が 330 基、屋外の調理場である<sup>ろあな</sup> 炉穴が 26 基、乳幼児遺体や出産時に生じる<sup>たいばん</sup> 胎盤を納めたとされる<sup>うめがめ</sup> 単独の埋甕が 2 基発掘され、次第に縄文時代のムラの全貌が明らかとなってきました。

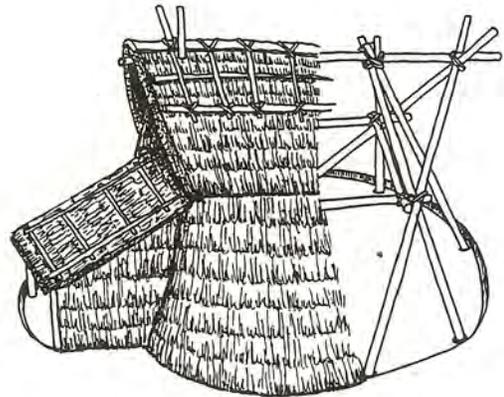
ここでは、金原遺跡や金原前遺跡で発掘された特徴的な住居跡等を詳しく見ていきたいと思ひます。

**縄文時代早期後半**（約 7,000 年前）の住居跡や炉穴等は島状に突き出した台地南側縁部のやや標高が高い場所でみつかっています。南側は<sup>あざしものや</sup> 字下の谷の低地（当時の海や沼）を望み、格好の漁場が広がっていました。ムラの北側には、おそらく木の実やイノシシやシカなどの動物などを狩ることができる森が広がっていたと考えられます。

**縄文時代後期初頭**（約 3,500 年前）には 18 軒もの住居跡があり、金原遺跡で最も人口が多く集落が大きかった時期といえます。台地西側の低地（当時の海や沼）を囲み込むように弧状に住居跡が並んでいました。住居跡と低地（当時の海や沼）との間には貯蔵穴など生活に使われた遺構が発掘されています。また、住居跡のやや東側では掘立柱建物跡（方形柱穴列）が見つかっています。この建物跡は竪穴住居跡とは性格の違う建物であるといわれています。この周囲では多量の土器が出土していることもこの建物跡の性格を考える意味で重要であるといえましょう。これより西側では遺構の数が非常に少なくなり、縄文時代後期初頭の土器もあまり出土しなくなります。これは、この地域に木の実の採集や動物を捕獲することが森が広がっていたのかもしれない。

### 建て替えられた家 金原前遺跡 1号住居跡

縄文時代後期<sup>ほりのうち</sup> 堀之内期（約 3,500 年前）に属し、直径 6m を計る大型で南側に出入り口を持つ住居跡です。柱跡は 35 本を数え、壁を巡ってほぼ同じ大きさの柱跡が並んでいました。中央部から 2 か所の炉跡（煮炊きをした所）が見つかっていることから建て替えを行っていたと推定されます。古い炉跡を壊して土坑（貯蔵穴など）がつけられており、その中からほぼ完形の土器が発掘されました。



**特別なものを納めた甕？金原遺跡4号住居跡**

縄文時代中期加曾利E式期(約4,000年前)の住居跡です。調査範囲の関係や近代の溝により壊されていたため、住居跡の規模は不明ですが、おそらく、出入り口部が張り出した柄鏡型住居跡であると考えられます。出入り口部に1基と出入り口部と主体部が接するあたりに1基、埋甕が配置されていました。埋甕の中からさらに別の土器の底部が出土し、なにか特別なものを埋納していたような出土状態でした。



調査風景

**掘立柱が並ぶ倉庫跡？金原遺跡1号方形柱穴列**

縄文時代後期称名寺期(約3,500年前)の方形柱穴列です。この遺構は7本の柱跡からなる掘立柱の建物で普段生活をするため造られた竪穴住居とは違う性格の建物であると考えられます。規模は長径6m、短径4.5mを計ります。この周囲からは多数の穴や土器が見つかっています。



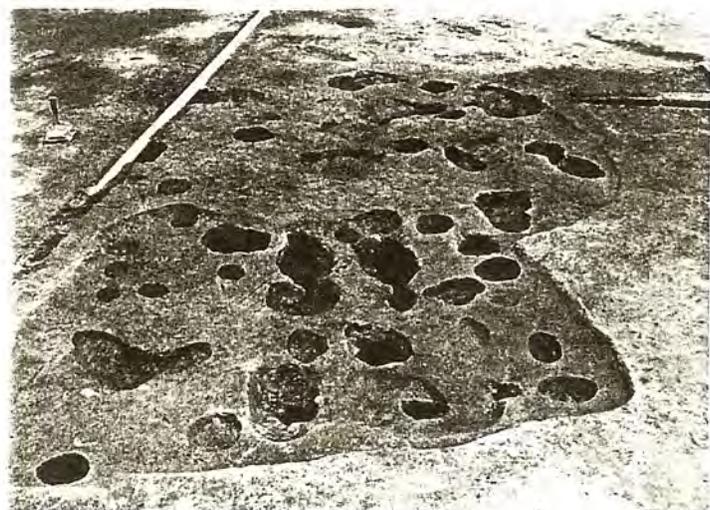
金原遺跡1号方形柱穴列

**3,500年後に再び住む金原遺跡2号・6号住居跡**

縄文時代早期条痕文期(約7,000年前)の6号住居跡を縄文時代後期称名寺期(約3,500年前)の2号住居跡が壊して造られていました。

2号住居跡は南側に出入口部が張り出した柄鏡型の住居跡です。主体部は長径5.2mを計り、12本の柱跡が等間隔に壁にそって建てられて、中央部には煮炊きをした炉跡が造られていました。

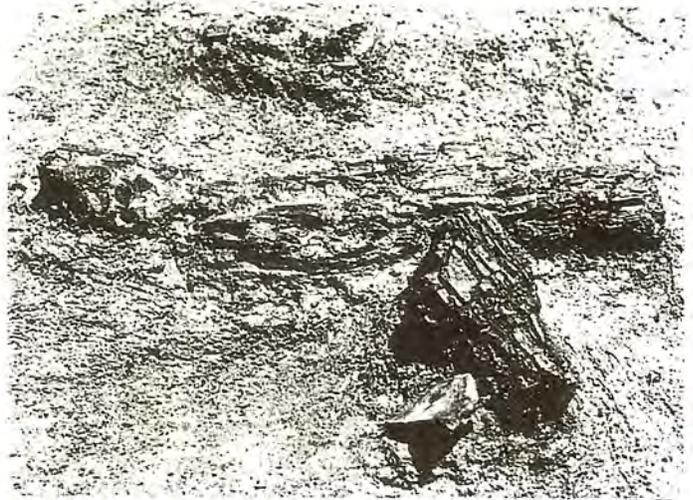
6号住居跡は2号住居の柄部により壊されていました。規模は長径4.5m、短径3.3mの長方形を呈します。石製の耳飾りなども出土しています。



金原遺跡2号住居跡・6号住居跡

**火災にあった家 金原遺跡3号住居跡**

縄文時代後期称名寺期（約3,500年前）の出入口部が南側に張り出した柄鏡型の住居跡です。主体部は長径6.2mを計る金原遺跡で最も大きな住居跡です。主体部と柄部の接する地点に埋甕が埋納され、その北に炉跡が構築されていました。この住居跡は焼失住居であったため、炭化した建築部材も発掘されています。



金原遺跡3号住居跡出土建築部材

**装飾品？も出土 金原遺跡7号住居跡**

縄文時代後期称名寺期（約3,500年前）の住居跡で出入口部が南側に張り出した柄鏡型の住居跡です。中央部には煮炊きをした炉跡が確認されています。柱の穴は34本を数え、造り替えた跡も確認されています。炉の近くからは土で作られた装飾品と考えられる遺物も出土しました。



金原遺跡3号住居跡

**金原遺跡最古の住居跡 金原遺跡9号住居跡**

縄文時代早期条痕文期（約7,000年前）の住居跡で、長径4.5m、短径2.8mを計る長方形を呈します。12本の柱跡が発掘されました。炉跡は検出されませんでしたがこの住居跡の近くから屋外で煮炊きを行った穴が見つっています。



金原遺跡9号住居跡

**重なり合う住居跡**

**金原遺跡11・12・13・14・17号住居跡**

いずれも縄文時代後期称名寺期（約3,500年前）の住居跡で5軒の住居が重なって発掘されました。近世の道路状遺構などで壊されていたため、あまり残りのよい状態ではありませんでしたが、多数の土器が出土しています。柱穴の底からはクルミも出土しています。

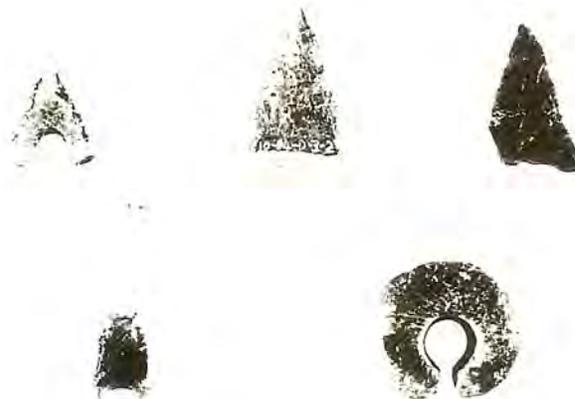
## 発見された縄文時代の道具

現在、私たちは快適な生活を送るために様々な道具を使っています。縄文時代の人々も生活を支えるために様々な道具を使っていました。しかし、何でも機械で作られている現代の道具に比べて、縄文時代は道具を作るための材料を集めたり、用途に合わせて自ら道具を加工したりしなければなりません。材料を集めるために、時には遠くの場所まで行ったようです。金原遺跡から多くの道具が発見されています。それらの道具から、縄文人の暮らしぶりを考えてみましょう。

### 1) 狩猟の道具

#### 矢じり(石鏃)

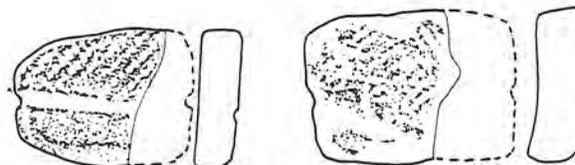
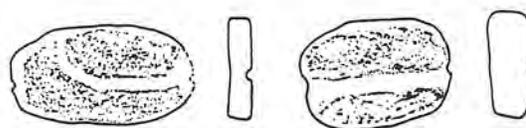
遠く離れた所にいる動物を射止めるために弓矢が用いられていましたが、その矢の先端に付けていた道具が矢じりです。遺跡からは数多く発見される道具のひとつで、金原遺跡でも様々な形をした矢じりが発見されています。ほとんどが黒曜石やチャートという石を加工して作られています。



ヤジリと耳飾り (逆井遺跡出土)

#### 尖頭器(ポイント)

動物を突き刺すために槍の先端に付けて使っていたようです。先土器時代から使われ始めたようですが、金原遺跡から出土した3点は縄文時代草創期(約 12,000 年前)のものと考えられます。



土錘 (前原遺跡出土)

#### 浮子

海(沼)で魚などを取るために用いられました。軽石で作られています。土錘のように刻みが入っているので投網用の浮子として使われたのかもしれませんが。

#### 土錘

網を使って海(沼)で魚などをとる時に、おもりとして網の先端につけて、用

いられました。両端に網の縄をかけるための切り込みが入っています。土器の破片を再利用して作られたものが多く、金原遺跡では住居跡からも出土しています。

## 2) 調理する道具

### 土器

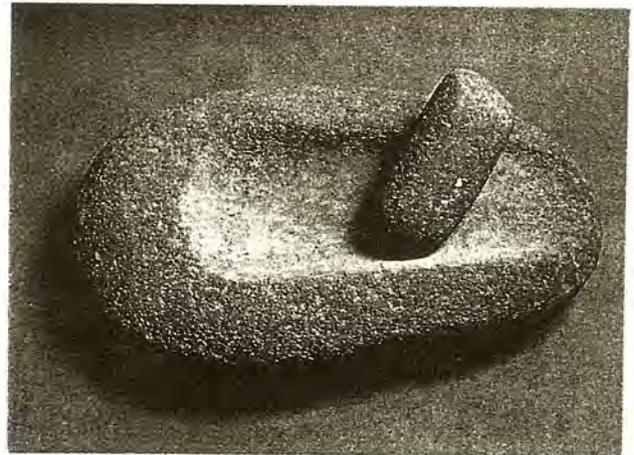
煮炊きをしたり、クルミなどの木の实や水を貯めておいたり、お供え物を供えるなど様々な用途の土器があります。金原遺跡からは縄文時代約 3,500 年前を中心に約 8,000 年前の土器など古い土器も見つっています。



土器（金原遺跡 17 号住居跡出土）

### 石皿

トチの実やドングリなどの木の实を石皿の上にのせ、<sup>たたきし</sup>で砕いたり、<sup>すりし</sup>ですりつぶしたりするための台として使われました。他の遺跡では石皿の上に磨石が置かれた状態で発見されたりもしています。石皿と磨石はセットで用いられました。金原遺跡ではほとんどが破片で発見されています。



石皿

### 磨石・敲石

石皿の上にのせたトチの実やドングリなどの木の实などを、<sup>いしざら</sup>たいて粉々に砕くために敲石を使い、すりつぶすために磨石を使いました。金原遺跡ではベンガラ（赤色顔料）が付着した磨石が発見されています。おそらく、遠くから運ばれてきたベンガラの原石をすりつぶしたのではないのでしょうか。櫛や漆器に塗られた、縄文漆の原材料としても用いられたものと考えられています。



凹石（逆井遺跡出土）

### 石皿

石皿とほとんど同じように、木の実を<sup>たたき</sup>敲石で割ったりする時に台などとして使われました。<sup>くぼ</sup>凹みに木の実を置いたのでしょう。凹みが多く、蜂の巣に似ていることから蜂の巣石とも呼ばれています。金原遺跡では破片が多く発見されています。

### ふた

どのように使われたか明らかではありませんが、おそらく現代と同じく<sup>にた</sup>煮炊きをするときに土器にかぶせて使われたと推定されます。金原遺跡2号住居跡から発見されたものは、口径が大きいのが特徴的です。大きな土器専用のふただったのでしょうか。

### 石斧

石を割って作られた<sup>だせい</sup>打製石斧と磨いて作られた<sup>まぜい</sup>磨製石斧があります。柱などの木の<sup>ぼくさい</sup>伐採や加工などに使われました。一部の石斧は、現代のシャベルのように土を掘るためにも使われたようです。

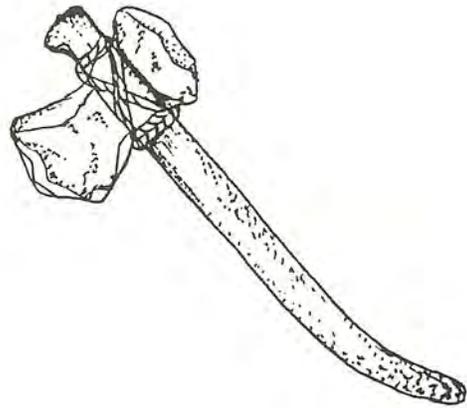
### 石匙

つまみが付いた石器で、一般的に皮をなめるときやナイフのような用途として使われたと推定されます。宮城県<sup>の</sup>遺跡からは紐のついた<sup>いしじ</sup>石匙も発見されています。常に持ち歩いていたのでしょうか。金原遺跡からは3点発見されています。

## 3) 装飾品

### 耳飾り

耳たぶに穴を開けて付けたイヤリングです。金原遺跡では6号住居跡から出土



石斧推定復元図



石匙（金原遺跡出土）



耳飾り使用状況復元図

したことから、約 7,000 年前のものと推定されます。逆井遺跡からも出土しました。

#### 指輪形土製品

直径約 1 cm の指輪形の土製品で、何に使われたのか明らかではありませんが、装飾品として使われたのかもしれませんが。金原遺跡 7 号住居の炉跡の近くから発見されました。



#### 4) 折りの道具

##### 埋甕

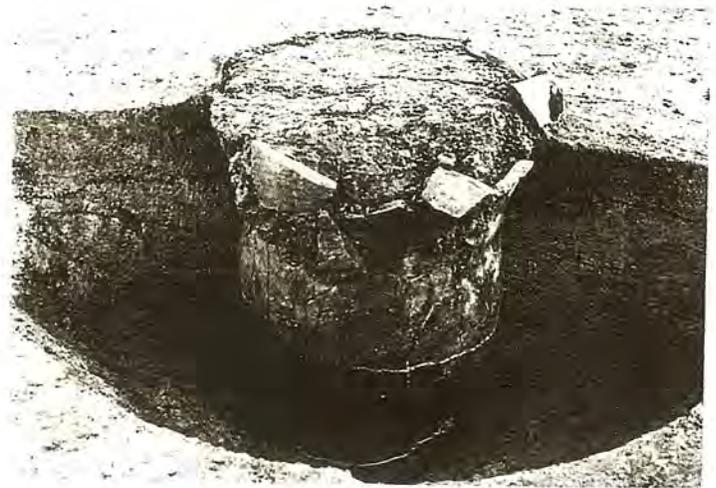
住居の出入口部に埋められた土器で、胎盤を収納しているといわれています。出入りの激しい所で踏みつけられることにより、子供が丈夫に育つことを祈って埋めたのでしょうか。江戸時代にも家の出入口の土間に胎盤を埋める風習があったと伝えられています。また、幼児を埋葬したという説もあります。

##### 石棒

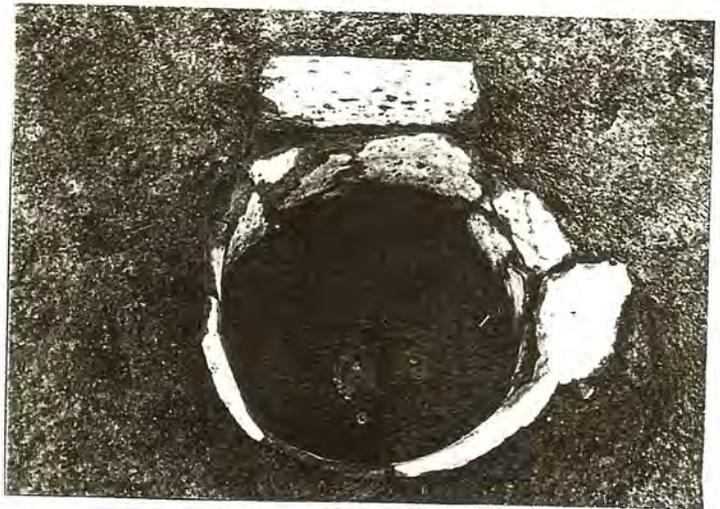
一般的に祭祀に用いられた道具といわれています。金原前遺跡 4 号住居跡で埋甕とセットで出土しました。

##### ミニチュア土器

名前のとおり土器のミニチュア版で、何に使われたのか明らかではありません。お祭りの時のお供え物のひとつだったのでしょうか。金原遺跡からは 3 号住居跡と 7 号住居跡から発見されています。



埋甕（金原遺跡 8 号住居跡出土）



埋甕と石棒（金原前遺跡 4 号住居跡出土）

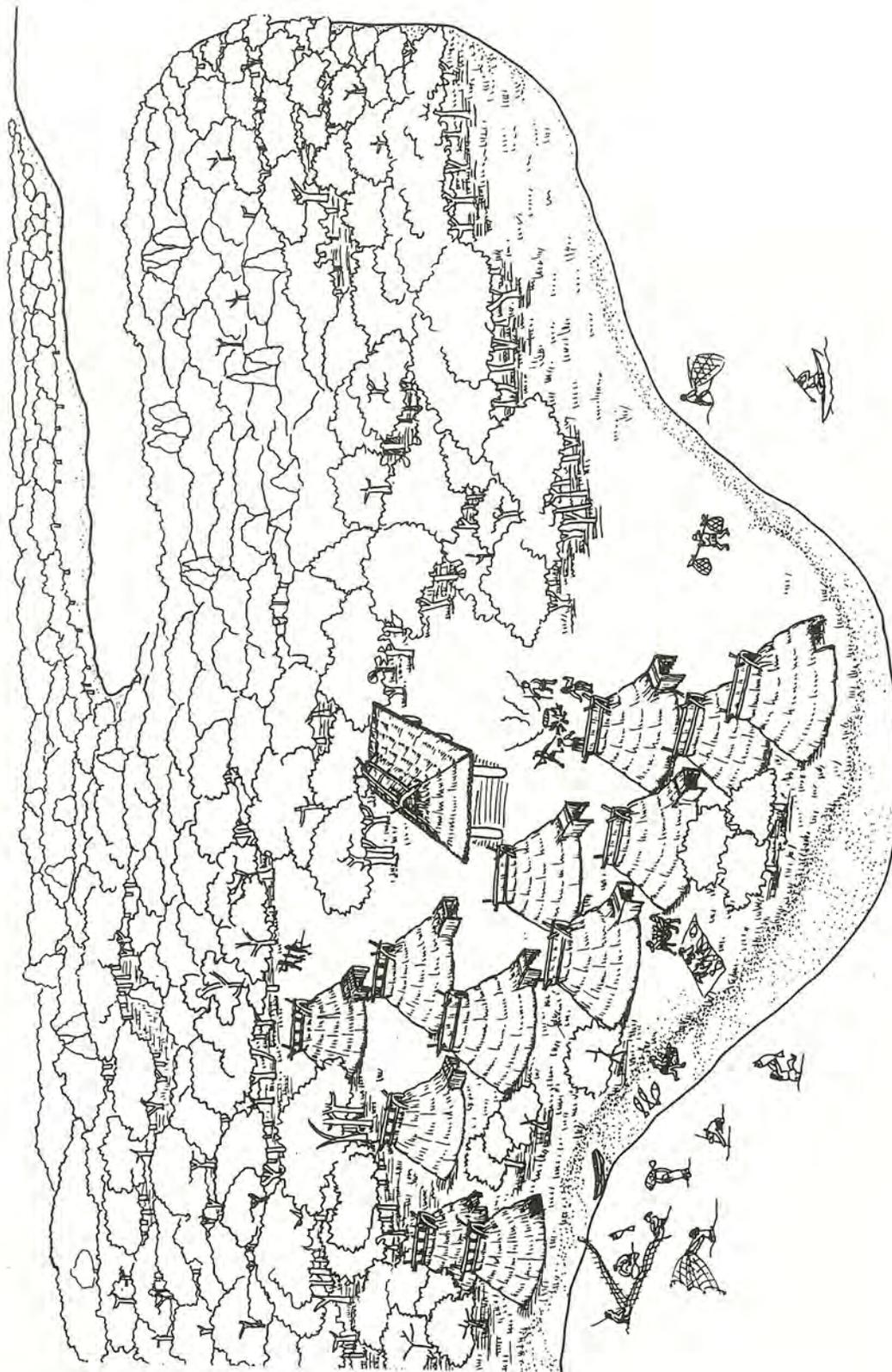


ミニチュア土器（金原遺跡 7 号住居跡出土）

## 参考文献

- 1) 宮代町教育委員会 1983 「前原遺跡」(『宮代町文化財調査報告書第1集』)
- 2) 宮代町教育委員会 1984 「山崎南遺跡・前原遺跡」(『宮代町文化財調査報告書第2集』)
- 3) 宮代町教育委員会 1995 「宮代の遺跡」(『宮代町史資料第7集』)
- 4) 宮代町教育委員会 1997 「逆井遺跡・山崎山遺跡」(『宮代町文化財調査報告書第6集』)
- 5) 小林達雄 1988 『古代史復元3』 講談社
- 6) 鈴木道之助 1991 『石器入門事典』 柏書房
- 7) 岡村道雄 1988 『歴史発掘1 石器の盛衰』 講談社
- 8) 斎藤忠 1992 『日本考古学用語辞典』 学生社
- 9) 戸沢充則 1994 『縄文時代研究事典』 東京堂出版

復元 金原遺跡の縄文ムラ



金原遺跡・金原前遺跡全測図



# 金原遺跡へのいざない

## 宮代 郷土資料館で出土品展

宮代町南部の金原遺跡から出土した縄文時代の埋蔵文化財を集めた企画展「金原遺跡出土品展」金原遺跡へのいざない」が、八月二十四日まで同町西原の郷土資料館で開催されている。会場には、発掘されたばかりの埋めがめや石おの、石棒など、土器・石器合わせて約四十点が公開されている。

宮代町南部の金原遺跡から出土した縄文時代の埋蔵文化財を集めた企画展「金原遺跡出土品展」金原遺跡へのいざない」が、八月二十四日まで同町西原の郷土資料館で開催されている。会場には、発掘されたばかりの埋めがめや石おの、石棒など、土器・石器合わせて約四十点が公開されている。

園（仮称）建設に伴い、昨年十月から事前発掘調査が行われている。約四千年から三千年五百年前の遺構や遺物などが発見されており、現在も貴重な埋蔵文化財の発掘作業が続けられている。

これまで同遺跡から、縄文時代中期から後期にかけての住居跡や、胎盤や幼児を埋葬したと思われる埋めがめ、貯蔵穴、土坑（どこう）などが発掘され、弓矢の先に取り付けるヤジリも木の実をすりつぶすときに使った石皿、たき石、漁網用おもりの土甌（どすい）など、当時の縄文人の生活を伺える道具も数多く見つかった。

同資料館によると、これらの出土品などから、金原遺跡に住んでいた縄文時代の人々は周囲を海や沼、森林に囲まれ、魚や貝などの海産物や木の実、森林に住み着いているシカやイノシシなどの動物たちと共生していたと考えられるという。「調査結果を一刻も早くご覧になってもらおう」と、出土品展を開催しました。発掘現場へも足を運んでもらいたい」と、町内外からの来館を呼び掛けている。

開館時間は、午前九時半から午後四時半まで。月曜日、第二・四火曜日休館。入場無料。

問い合わせは、宮代町郷土資料館（☎0480・34・0000）へ。

### 40点の土器・石器を公開

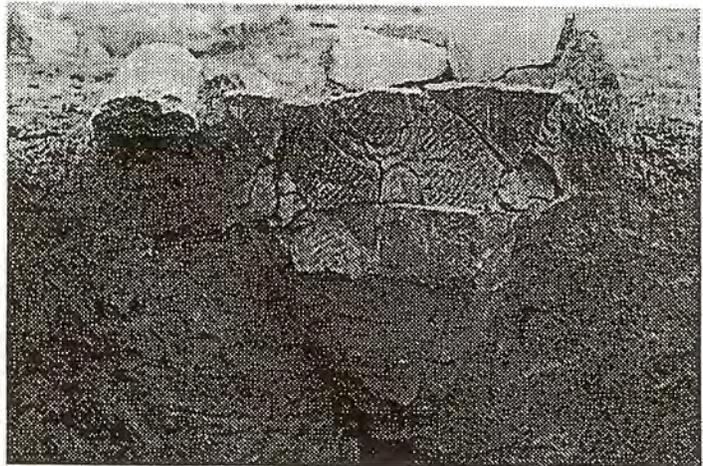


発掘されたばかりの4000年前の埋設土器が公開されている金原遺跡出土品展—宮代町郷土資料館

平成9年6月24日 埼玉新聞

## 宮代・金原遺跡から出土 縄文土器など40点展示

8月24日まで、町郷土資料館で



土中から見つかった埋設土器

宮代町の金原遺跡から出土した縄文時代の土器や石器など約四十点を集めた「金原遺跡出土品展」が、同町西原の町郷土資料館で開かれている。

金原遺跡は、現在も発掘作業が続けられている縄文時代の遺跡で、半島状に突き出た台地から同時代中期の住居跡が計九件発見されている。

この発掘現場からは、死産児を入れる甕棺として使われていたとみられる複数の埋設土器や、祭祀などに使われたと推定される石棒、石器などが多数出土している。

出土品の中には、漁網のおもりに使ったとみられる土甌もあり、同資料館は、「同遺跡が、海や沼に囲まれるように突き出た台地に築かれた集落だった可能性があり、当時の人々が陸土のものだけでなく、水産物も採取していたことがうかがえる」と話している。

八月二十四日まで。入場無料。開館時間は午前九時半から午後四時半まで。月曜日、第二、第四火曜日、

平成9年7月1日 読売新聞

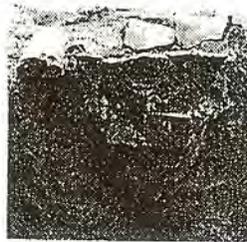
〈宮代〉

# 発掘！ 「金原遺跡」

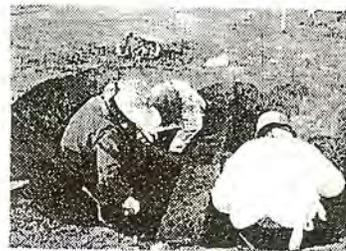
平成16年に開催される埼玉国体のアーチェリー競技予定場である宮代町金原地区(仮称金原運動公園)を造成したところ、公園への進入道建設予定地から縄文時代の遺跡を続々と発見、連日及び発掘調査が行なわれている。

現在までに、約四千年から三千五百年前(縄文時代中期後葉から後期前葉)といわれる多数の土器や石器、軒の竪穴式住居跡、また貯蔵用の穴むしくは蓋などと考えられ

縄文時代の住居跡、土器や石器など続々…



発掘の断面



ついに発掘中

平成9年1月11日 東武朝日

〈宮代〉  
発掘調査続く  
金原遺跡



新たに発掘された埋篋

出土品次々と…

連日発掘調査が実施されて、アーチェリー会場である金原(宇金原地内)運動公園及び、運動公園へのアクセス道路(町道)建設に多数出土し、縄文時代後期の伴い平成八年十月から発掘調査を考えるうえで非常に重要な遺跡となっている。

昨年八月には、中国の殷墟金原遺跡は宮代町の南部に位置し、単人堀川を挟んで白岡町、春日部市と対峙している。平成十六年度埼玉国体の

を示した。

### 金原遺跡

#### 発掘調査の経過

現在までに確認された遺物は次のとおり。

旧石器時代細石刃文化期の木葉形尖頭器1点、縄文時代約15点・細石刃核の調査剥片1点・縄文時代早期(約七千年前)の竪穴住居1軒・竪穴8基、縄文時代中期(約四千年前)の竪穴住居2軒・埋篋

土器3基、縄文時代後期(約三千五百年前)の竪穴住居5軒・竪穴状遺構1基・埋設土器2基・土坑約100基。

新たに、旧石器時代後期(約二万四千年前)のナイフ形石器2点、縄文時代草創期(約一万三千年前)の細石器の木葉形尖頭器1点、縄文時代後期の竪穴住居2軒、方形柱穴列1基、埋篋1基。

今後、調査区北側及び西側を調査していく予定。

平成10年1月10日 東武朝日



平成10年度第3回企画展

『遺跡からのメッセージ』

～金原遺跡最新出土品展～』

平成10年8月13日(木)～10月25日(日)

発行年月日 平成10年8月13日

編集発行 宮代町郷土資料館

☎345-0817

埼玉県南埼玉郡宮代町字西原289番地

☎0480-34-8882

0480-31-0674 (金原発掘事務所)

<http://www1.sphere.ne.jp/miyasiro>

遺跡セミナー

金原遺跡とその時代  
～縄文人の衣食住～

平成10年9月6日（日）

講師 鈴木敏昭氏

（熊谷市教育委員会・宮代町史監修者）

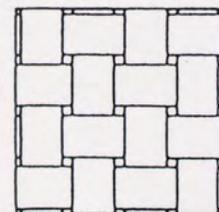
宮代町郷土資料館



縄文時代の編布の構造と材質

遺跡名	時期	経緯別	燃り形式(向)	糸間隔 mm	編み密度 (本/cm)	糸の太さ mm	材質	文献
1 朱円	後期末	経		4.0~6.0		0.6~0.7		2
2 忍路土場	後期	緯	諸燃り(左)		12.0	0.6~0.7		
4 亀ヶ岡	晩期	経		3.0~5.0			オヒョウ	3
		緯			8.0~10.0		オヒョウ	
		経		10.0				
		緯	諸燃り?(右) 諸燃り(左)		6.0	1.0		
6 中山	晩期前半	経	諸燃り(左)	0.4~1.7	7.0~8.0	1.0~1.7	カラムシ	3
		緯	諸燃り(左)	0.1~0.3	10.0	0.7~0.8	カラムシ	
7 山王田	晩期中葉	経	諸燃り(左)	7.0~10		1.0		
		緯	諸燃り(左)		8.0	1.0		1
		経	諸燃り(左)	10.0		1.0		
		緯	諸燃り(左)		6.0~7.0	1.0		
8 押出	前期	経		1.0~1.3	8.0	0.7~1.0	アカン	3
		緯	諸燃り?		8.0	0.8~1.2	アカン	
		経		3.3	3.0	2.0~3.0		
		緯	諸燃り(左)		2.5	2.0		*
9 荒屋敷	晩期	経		5.0~6.0		1.0~1.2		
		緯	諸燃り(左)		6.0~7.0	1.0~1.4		
		経	諸燃り(左)	2.5~3.6	2.8~4.0	1.3~1.7	アカン	
		緯	片燃り(左)	1.2~1.5	6.8~8.4	0.8~1.0	アカン	3
12 米泉	晩期中葉	経	諸燃り?	2.5~3.3	3.0~4.0	0.8~1.3	アカン	
		緯	諸燃り(左)	1.0~1.3	10.0~12.0	0.6~0.9	アカン	
		経	諸燃り(左)	10.0~15.0	1.4~2.0	2.0	アカン	3
		緯	諸燃り(左)		5.0~6.0	2.0~2.5	アカン	

注1 遺跡番号は表1に同じ。注2 諸燃り(左)：右燃りの糸を2本合わせ左燃りにする。注3 ※は経糸が左右両絡みの編布。  
 引文文献 1 伊東信雄氏1966「縄文時代の布」(『文化』第30巻第1号) 2 小笠原好彦氏1970「縄文・弥生の布」(『考古学研究』第17巻第3号) 3 布目順郎氏1989「金沢市米泉遺跡出土のアンギン様編布 No.1について」(『金沢市米泉遺跡』石川県立埋蔵文化財センター) 布目順郎氏1992「目で見える 縄文の考古学 縄文遺物資料集成」(染織と生活社)



編み方  
 ヨコ1本越え1本潜り } 1本送り  
 タテ1本越え1本潜り }

図41 編み方模式図(平編)  
 (田中敦子氏提供)

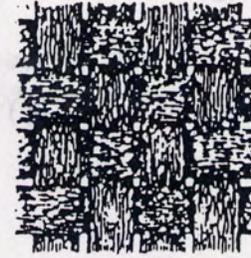
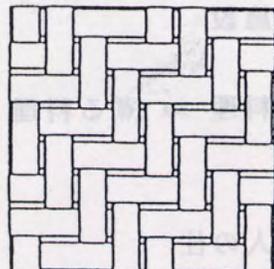


図42 平編組織  
 (『被服材料学』より)



編み方  
 ヨコ2本越え2本潜り } 1本送り  
 タテ2本越え2本潜り }

編み方模式図(網代)  
 (田中敦子氏提供)

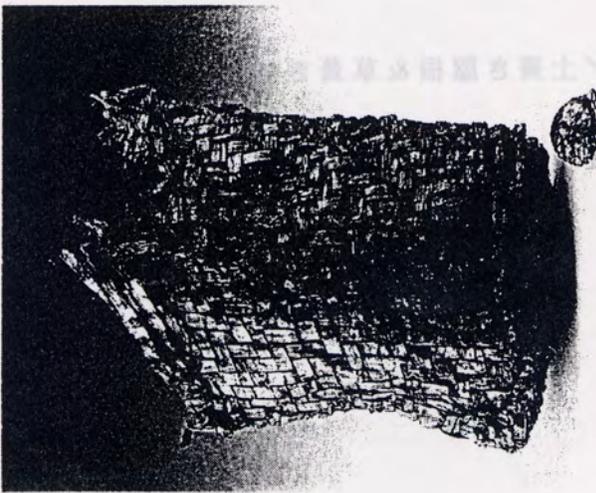


写真87 青森県三内丸山遺跡  
 出土のポシエット  
 (縄文前期~中期) (青森県教育庁埋蔵文化財調査センター提供)

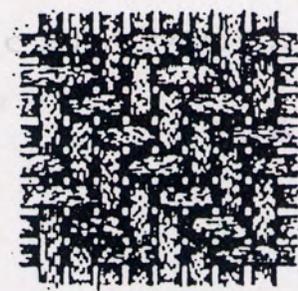
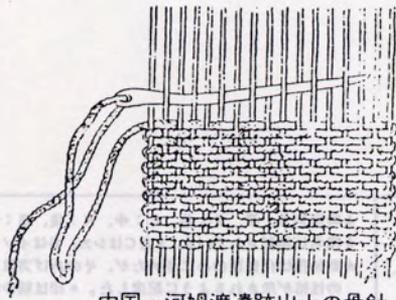
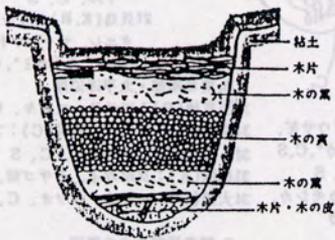
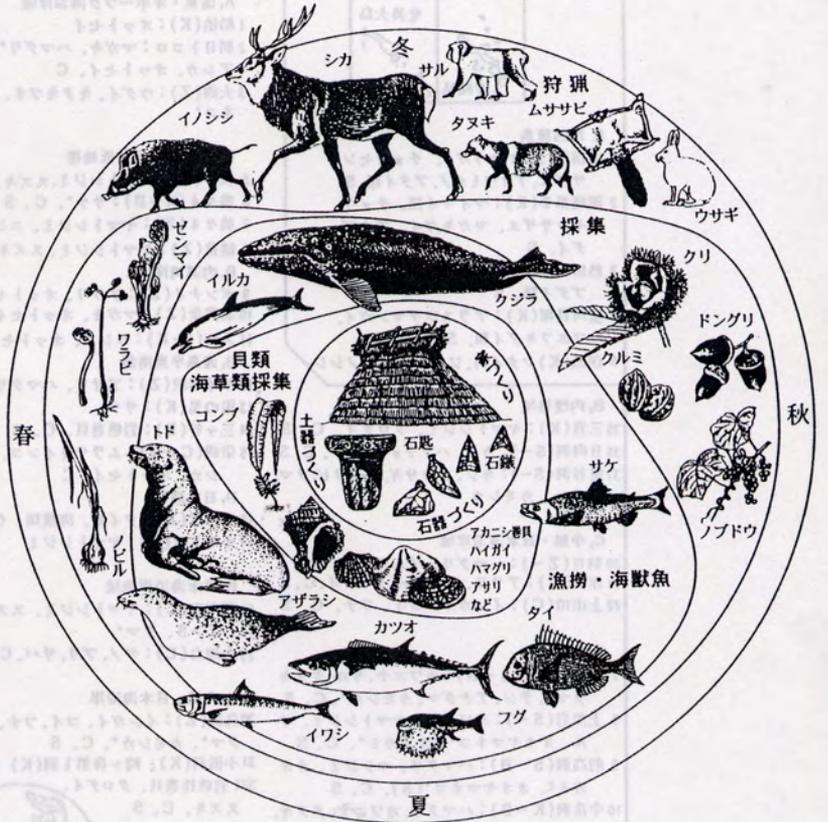


図44 網代組織



中国・河姆渡遺跡出土の骨針  
使用の織物  
〔「中国紡織科学技術史」より〕

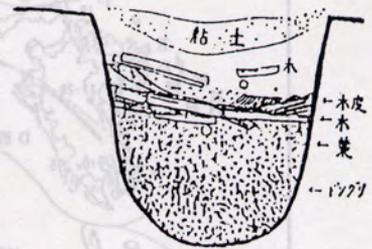
縄文カレンダー



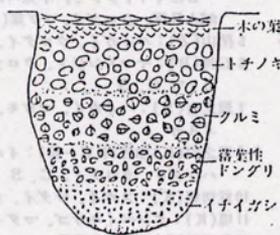
1 坂の下遺跡



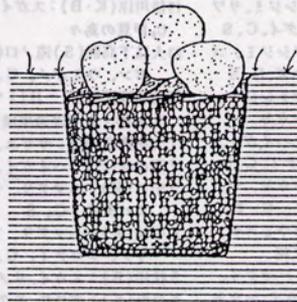
2 岩田遺跡



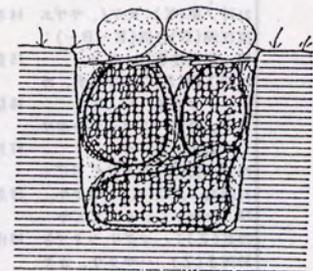
3 南方前池遺跡



4 穴太遺跡(滋賀県)



5 曾畑遺跡



6 曾畑遺跡

貯蔵穴断面模式図



- E 南西諸島**
- 1 宇宿(K): ヤコウガイ、チョウセンサザエ、アオミマガメ、ブタイ類、S
  - 2 面橋第2(K): マイマイ類、チョウセンサザエ、マガキガイ、アオブタイ、S
  - 3 熱田原貝塚(K): フェエキダイ、ブタイ類、S
  - 4 室川貝塚(K): アラスシケマンガイ、フェエキダイ類、S
  - 5 伊波(K): タイ科、ジュゴン\*、イノシシ

- B<sub>1</sub> 内陸地域**
- 35 三宮(K): ヤマトシジミ、クロダイ、C、S
  - 36 日向洞(S~): カモ、ハクチョウ、クマ、C、S
  - 37 室谷洞(S~): キジ、ノウサギ、ムササビ、クマ、テン、カモシカ

- C<sub>1</sub> 中部・日本海沿岸域**
- 20 朝日(Z~): ハマグリ、イルカ、C、S
  - 21 赤浦(C): アサリ、マイワシ、クロダイ、C、S
  - 22 上山田(C): イシガイ、コイ、フナ、C、S

- D<sub>1</sub> 内陸地域**
- 7 帝釈観音堂(S~B): カワナナ、サル、タヌキ、クマ\*、テン、アナグマ、カモシカ\*、C、S
  - 8 上黒岩(S~): カワナナ、ヤマトシジミ、サル、オオヤマネコ\*、オオカミ\*、C、S
  - 9 前高洞(S~B): ハマグリ、マシジミ、オオカミ\*、オオヤマネコ\*(S)、C、S
  - 10 中岳洞(K~B): ハマグリ、カワナナ、タヌキ、アナグマ、ムササビ、C、S
  - 11 片野洞(S~): ノウサギ、タヌキ、サル、C、S

- D<sub>2</sub> 近畿~瀬戸内~九州**
- 12 彌宜(Z): ハイガイ、C、S
  - 13 森ノ宮(K~B): マガキ、セタシジミ、サワラ、クロダイ、C、S
  - 14 石山(S): セタシジミ、コイ、フナ、ナマズ、C、S
  - 15 真島(S): ヤマトシジミ、ハイガイ、マガキ
  - 16 福田(K)など: ハイガイ、マガキ、クロダイ、C、S
  - 17 馬取西(K): マガキ、マガイ、イシガイ、C、S
  - 18 黒崎(K): イボウミナ、マガキ、フグ類
  - 19 山鹿(Z~K): ハマグリ、クロダイ、スガイ、マガキ

- D<sub>3</sub> 南西諸島**
- 20 新延(Z~K): ヤマトシジミ、クロダイ、スッポン\*
  - 21 沖ノ原(K): スガイ、サザエ
  - 22 江湖(S)白浜(K~B~): カイ、アシカ
  - 23 岩礁性巻貝、サメ
  - 24 岩下洞(S): カワナナ、カノコガイ、C、S
  - 25 沖ノ島(Z): ベッコウガサカイ、アシカ
  - 26 志多留(K): スガイ、サザエ
  - 27 阿高・黒崎(C): マガキ、
  - 28 ヤマトシジミ、スズキ
  - 29 荘(Z): ハマグリ、シオフキ
  - 30 阿多(Z): ハマグリ、カキ

- A<sub>1</sub> 道東・オホーツク海沿岸域**
- 1 船泊(K): オットセイ
  - 2 朝日トコロ: マガキ、ハマグリ\*、ヒグマ、アシカ、オットセイ、C
  - 3 大曲(Z): ウグイ、キタキツネ、オオヤマネコ\*

- B<sub>1</sub> 道央部・石狩低地帯**
- 5 美々(Z): ヤマトシジミ、スズキ、ガンギエイ、C
  - 6 美々4(K~B): サケ\*、C、S
  - 7 美々4(Z): ヤマトシジミ、ニシン、スズキ
  - 8 植苗(Z): ヤマトシジミ、スズキ、メナダ、C
- B<sub>2</sub> 内浦湾沿岸域**
- 9 ポンナイ(Z): アサリ、オットセイ、C
  - 10 北黄金(Z): マガキ、オットセイ、C
  - 11 入江(C~K): ニシン、オットセイ、C

- B<sub>3</sub> 渡島半島南部**
- 12 サイベ沢(Z): アサリ、ハマグリ
  - 13 湯の里(K): サケ
  - 14 三ッ谷(B): 岩礁巻貝、C、S
  - 15 栄峡(C~B): ムラサキインコ、ニシン、アシカ、オットセイ、C
- B<sub>4</sub> 日本海側**
- 16 中の平(Z): タイ類、海鰱類、C、S
  - 17 オセドウ(Z): ヤマトシジミ

- B<sub>5</sub> 日本海沿岸地域**
- 28 荻刈沢(C): ヤマトシジミ、スズキ、C>S、クマ\*
  - 29 大畑台(C): サメ、ブリ、サバ、C\*

- D<sub>1</sub> 内帯・日本海沿岸**
- 30 鳥浜(Z): イシガイ、コイ、フナ、クマ\*、カモシカ\*、C、S
  - 31 小浜洞(K): 崎々島第1洞(K)
  - 32: 岩礁性巻貝、クロダイ、スズキ、C、S

- C<sub>2</sub> 中央地方**
- 13 折原(S): サケ、マス、サル、ノウサギ、ムササビ、テン、クマ\*、カモシカ\*、C、S
  - 14 唐沢(B~): サル、クマ、C、S
  - 15 中川(C): イノシシ、シカ\*、カモシカ、
  - 16 金生(B): イノシシ(若)、シカ

- C<sub>3</sub> 太平洋沿岸域**
- 17 西(K): ヤマトシジミ、ダンベイキサゴ\*、C、S
  - 18 規塚(K): ヤマトシジミ、クロダイ、C、S
  - 19 伊川津(K~B): スガイ、クロダイ、C、S
  - 20 伊豆の島々
  - 23 大島下高洞(S)滝ノ口(C): ハリセンボン、ウミガメ、C、S(鹿角)
  - 24 新島渡津根(K~B): ウミガメ、S\*、C

- D<sub>4</sub> 外帯・太平洋沿岸域**
- 1 大鷲海島(B): サザエ、アホウドリ
  - 2 高山寺(S): ハイガイ、C、S
  - 3 中村(K): ハマグリ、ヤマトシジミ、クロダイ、C、S
  - 4 平城(K): ハマグリ、フトヘナタリ、サメ、クロダイ、C、S
  - 5 松浜(B): スガイ、サメ、ボラ、C、S
  - 6 草野(K): アサリ、モクハチアオイガイ

★時期別S: 早、Z: 前、C: 中、K: 後、B: 晩期  
★種名は略記されている。またCはシカ、Sはイノシシ  
★動物種は代表種のものに止めたが、そのあげ方は遺跡の性格が示されるように配慮した。\*印は稀少標本  
【文献】金子1980、牛沢1980、金子・中村・丹羽1982

- A<sub>2</sub> 道東・太平洋沿岸域**
- 4 東綱路(Z): アサリ、ニシン、イルカ、アシカ、オットセイ\*

- B<sub>1</sub> 下北半島域**
- 18 札地(B): 海鳥類、アシカ
  - 19 殿花(C): ヤマトシジミ、スズキ、カワハギ、クマ、カモシカ、C、S\*
  - 20 匠七谷地(Z): ヤマトシジミ、スズキ、カモシカ、クマ\*、C
- B<sub>2</sub> 東北中部・太平洋沿岸**
- 21 大洞(K~B): アサリ、マグロ、C、S
  - 22-23 清水(Z)太陽台(C): スガイ、レイシガイ、マグロ類、C、S
  - 24 南境(C~K): ハマグリ、スズキ、マグロ、C、S
  - 25 宮戸島捕鯨(K): アサリ、スズキ、マグロ、C、S

- B<sub>3</sub> 東北内陸地域**
- 26 蛇王洞(S): イガイ、マグロ、サル、C、S
  - 27 貝島(K,B): イシガイ、オオカニシ、サケ、フナ、キギ、マグロ\*、オオカミ\*、C、S
- B<sub>4</sub> 東北南部・太平洋沿岸**
- 30 三貫地(B): アサリ、スズキ、C、S
  - 31 宮田(Z): キサゴ、浦尻(C): アサリ、共
  - 32 にスズキ、クロダイ、C、S
  - 33 綱取(K): クボガイ、カサゴ類、C、S
  - 34 大畑(C): スガイ、カツオ、C、S

- C<sub>1</sub> 関東平野とその周辺**
- 1 道理山(Z)三反田(K): ヤマトシジミ、クロダイ、C、S
  - 2 余山(K): チョウセンハマグリ、ボラ、スズキ、フグ、C、S
  - 4 利根川下流の貝塚群(S~B): S 初頭とK~Bにヤマトシジミ。小見川以東はKも鹹水貝塚。クロダイ、フグ類(K)、C、S
  - 5 間山(Z): ハイガイ、クロダイ、C\*、S\*
  - 6 石神(B): ヤマトシジミ、クロダイ、オオカミ\*、C、S
  - 7 飛之台(S): ハイガイ、マガキ、スズキ、イルカ\*
  - 8-9 堀之内(K)加曾利(C~K): イボキサゴ、ハマグリ、クロダイ、C、S
  - 10 鉦切洞(K): スガイ、マガイ、オオカミ\*
  - 11 堤(K): ダンベイキサゴ、マガイ、カツオ
  - 12 井戸川(B): 岩礁小巻貝、カツオ、イルカ

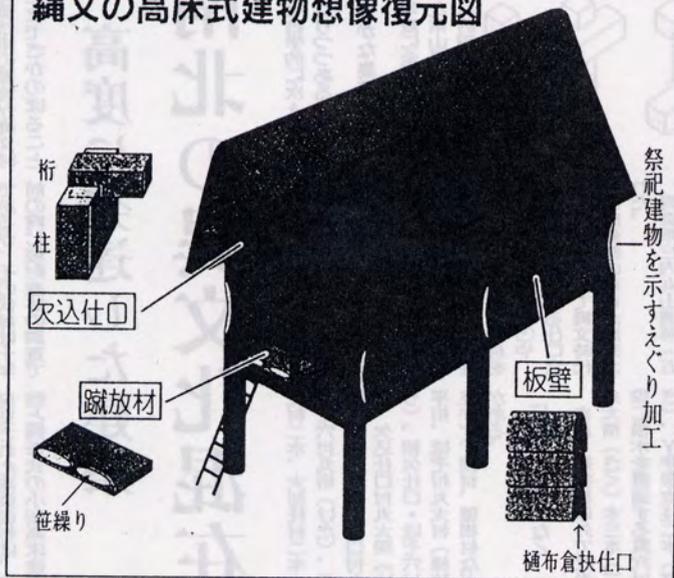


縄文時代の漁撈・狩猟活動の地域性を示す地図

鹿島灘北岸域（日立より那珂湊に至る間）	那珂湊以北は海岸に面する平野は狭いが、中期から後期に及ぶ貝塚がある。那珂川下流域には前～後期に及ぶラグーン内貝塚があり、漁具に特徴ある形のものがつくられている。
九十九里側下総台地、房総半島東岸	下総台上に外海、内湾両方の性格をもつ貝塚が前期以降形成。魚は内湾のものが主。かつて豊富な遺物を出した一宮貝塚は、外海に近いラグーン内貝塚の典型で、外海系魚貝も多かった。
東京湾岸、奥東京湾	早期末以降数多くの貝塚の形成をみる。早・前期はカキ、ハイガイ主体貝塚。中、後期には奥東京湾より貝塚は減少し、東京湾岸域で、砂泥性貝種のイボキサゴ、ハマグリ、アサリ、シオフキ主体の大貝塚が形成。規模の大きいのは東岸江戸川河口域～養老川域に分布。
利根川流域と霞ヶ浦周辺	霞ヶ浦を含めた広大な砂泥性内湾にひろげ、貝塚の形成は早期より晩期に及ぶ。早期前半に小形ヤマトシジミ主体、末葉にマガキ、前期以降ハマグリ主体貝塚が形成。魚は下流域ほど多く、フグ類、クロダイ、マダイが主になっていく。獣骨は後、晩期ほど多く、イノシシ、シカの主体性が強まる。
東京湾口より相模湾沿岸	房総半島南端を含め、三浦半島の周辺とそれ以西は早期末以降の狩猟、漁撈の盛行した地域。マダイその他の岩礁魚、イワシ類が豊富、マイルカ類が顕著（他に各種のイルカ類を含む）。アシカなど齧脚類は少ない。後期後半期にはシカ、イノシシなどの陸獣が増え、漁獲のウェイトの置き方あるいは技術上の変化がみられるに至る。
伊豆半島沿岸	伊豆半島沿岸域での漁獲を具体的に示す遺跡が最近知られている。漁・猟両面での活躍の好条件があったと思われるが、ただ海岸平野部のせまいことが制約となった。

# 国内最古の建築技術確認

縄文の高床式建物想像復元図



## 縄文中期末

# 高床式の全容解明

小矢部市桜町遺跡で縄文中期末(四千年前)の土層から出土した建築部材に、これまで弥生中期以降とされた建築技術の「欠込仕口」「樋布倉扱仕口」「箆繰り」が使われていたことが十二日、明らかになった。いずれもクリ材で、東京国立文化財研究所の宮本長二郎・国際文化財保存修復協力センター

一長が鑑定した。加工跡などから用途がほぼ特定でき、祭祀などに使ったとみられる高床式建物の構造がはっきりしてきた。明らかになった建築技術は、いずれも定説を二千年ほどさかのぼる。

## 加工跡で用途特定

小矢部市  
桜町遺跡  
国立文化財研  
宮本氏鑑定

「欠込仕口」は、「輪羅」加工し、組み合わせて一枚の壁に仕上げ、乾燥の反りを防ぎ、雨水も入らない。板は長さ九十センチ、幅十五センチ、厚さ六・五センチで下部の凹部は深さ三・五センチ、二つに折られていた。中国・浙江省の河姆渡遺跡では七千年前の床材に使われ、国内では弥生後期の土小紋遺跡（島根県松江市）が最も古い。削り口が箆の葉のように見える「箆繰り」は、高床式建物入り口の「蹴放材」に二カ所施してあった。「蹴放材」は長さ一・六メートル、幅二十八センチ、厚さ八センチで、二

# 「縄文」にさかのぼる木造技術の源流

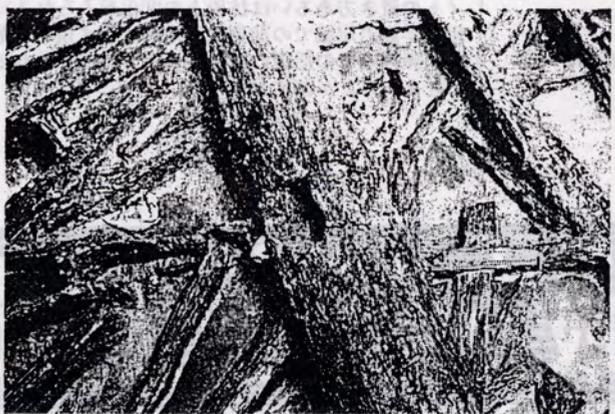
宮本長二郎



縄文時代といえは、一昔でなく、現在まで伝わる木造建築技術の源流が縄文時代であるが、その伏線は千年前までさかのぼること、前の同じ桜町遺跡の調査で明らかになった。少くとも縄文人の住まいや祭りごとにかかわる建築について、それまでの堅穴住居にイメージされた未熟な技術のみ

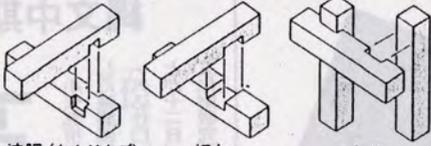
## 高度に発達した建築

## 南北の異文化混在



富山県小矢部市桜町遺跡から出土した渡腰（わたりあ）仕口のある木材（小矢部市教委提供）

仕口加工の模式図



欠込 相欠 渡腰(わたりあ)

が、考古学的に次々と明らかになりつつある。▽豊かな集落構成 昨年夏に全国的な話題となった富山県小矢部市桜町遺跡(約四千年前)出土の木材には高床を支える簡材(受ける貫穴(めきぎあな)や、二階部分の腰を渡仕口穴)があり、はじめて縄文時代の高床建築の存在が認知された。▽丸桁と平桁混在 列記した部材の形状で、断面円形の丸桁と板状の平桁の二種類の桁が混在している。両形式とも例は少ないが弥生時代にも出土例があり、この意味でも弥生時代は縄文時代からの建築技術を継承しているといえるが、丸桁と平桁は本来、ルーツを異にする文化の建築技術であったと思われる。

丸桁は奈良時代の寺院建築に採用されていることから、唐文化の形式であり、平桁は現在でも東南アジア諸国の民族建築に見られることから南方文化の形式と考えられる。また、出土材に多い、角ほぞ仕口は南方文化圏の特徴を表し、一部の出土材に見られる大入れほぞ仕口や丸ほぞ仕口は、奈良時代建築と共通することから北方文化圏の影響が考えられる。また、桜町遺跡出土の建築部材はその建築技術はむろんのこと、日本文化の根源を探る多くの情報を含んでいる。(東京国立文化財研究所国際文化財保存修復センター長・建築史)

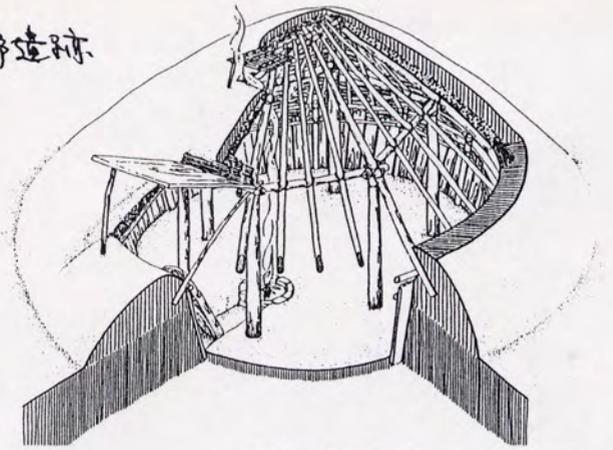
出土地の二本の柱材と、青森県三内丸山遺跡の発見にある。高床建築は米作りの技術とともに米倉として弥生時代に普及し、縄文時代には存在しなかったとされ、平桁、ほぞ付丸太材(棟持柱)か、腰材、屋根材などがある。▽大切に無駄なく また、建築材以外では半丸太欄(こ)・木三本(三)段に横木を貫通する貫穴付仕口(わたりあ)が、今までの調査で認められた。▽丸桁と平桁混在 列記した部材の形状で、断面円形の丸桁と板状の平桁の二種類の桁が混在している。両形式とも例は少ないが弥生時代にも出土例があり、この意味でも弥生時代は縄文時代からの建築技術

し場所としている。そのために、転用後の材の風化、腐朽が進み、かろうじて仕口等の形状が判別できるものも多い。しかし、こうして二次転用されたために四千年間、地中に保存されたわけでは、木材資源を大切に無駄なく使う伝統が縄文時代に発生していることにも注目すべきである。また、出土材に多い、角ほぞ仕口は南方文化圏の特徴を表し、一部の出土材に見られる大入れほぞ仕口や丸ほぞ仕口は、奈良時代建築と共通することから北方文化圏の影響が考えられる。また、桜町遺跡出土の建築部材はその建築技術はむろんのこと、日本文化の根源を探る多くの情報を含んでいる。(東京国立文化財研究所国際文化財保存修復センター長・建築史)

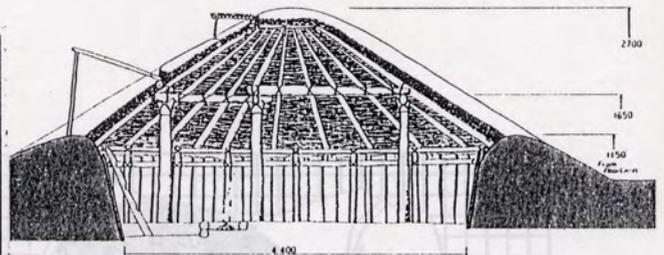
現代に通じる技術 橋本澄男石川県立埋蔵文化財センター所長の話 欠込仕口が見つかったことは非常に驚いている。大工が使用する技術でもあり、現代建築に通じる。北陸の厳しい気象条件が建築技術の発達につながったのではないかと。

北日本新聞98・5・13

みよもと・ながしろう 1929年大阪市生まれ。横浜国大大学院修士課程修了。奈良国立文化財研究所文化庁を経て94年から現職。著書に「日本原始古代の住居―平城京―」など。大分合同・共同

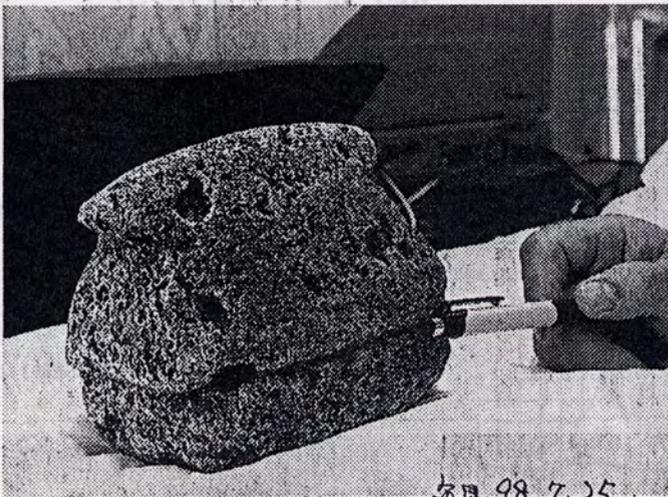


D E 24住復原パース



D E 24住復原断面図(南北方向 縮尺=約100分の1)

北海道の八雲町の遺跡で出土した縄文時代中期の「家型石製品」。壁の部分がみられる—同町郷土資料館で



毎日 98.7.25

## 縄文中期に壁付き住居

北海道八雲町栄浜の縄文中期(4500~4600年前)の「栄浜1遺跡」から昨年8月、軽石で作った当時の住居模型がほぼ完全な形で出土していたことが24日に分かった。模型には壁とみられる部分もあり、確認できる。

### 北海道八雲町で模型出土

### 「屋根のみ」定説覆す

これまで柱の穴などから上部構造を推測するほかなかった縄文住居で、模型の出土は考古学上、極めて大きい意義を持つとみられる。出土したミニチュア「家型石製品」は、長さ14・92センチ、幅11・26センチ、高さ13・

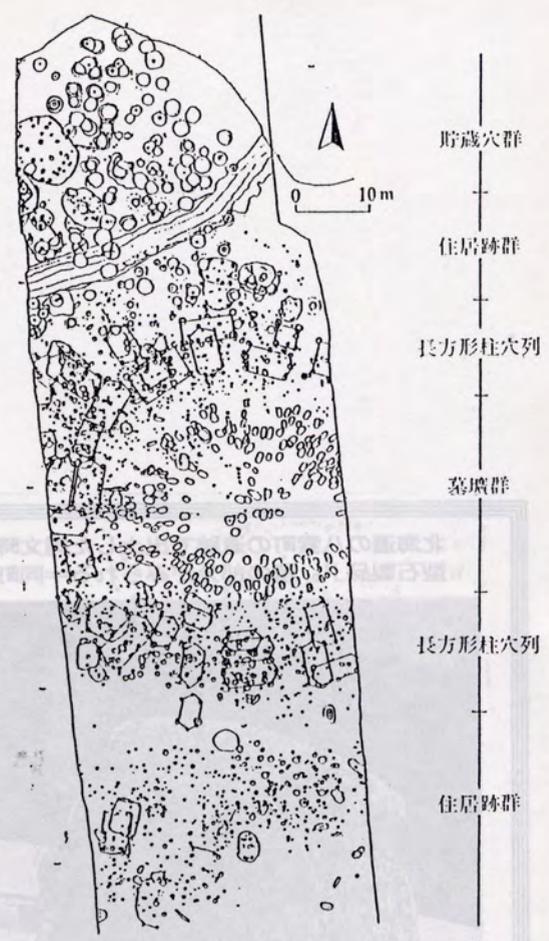
道埋蔵文化財センターの畑宏明調査第一部長は「当時の住居は今回の模型のような形式ばかりではなく、何種類があったらうと思われ、大きな価値のある出土品だ」と話している。

【江口一】

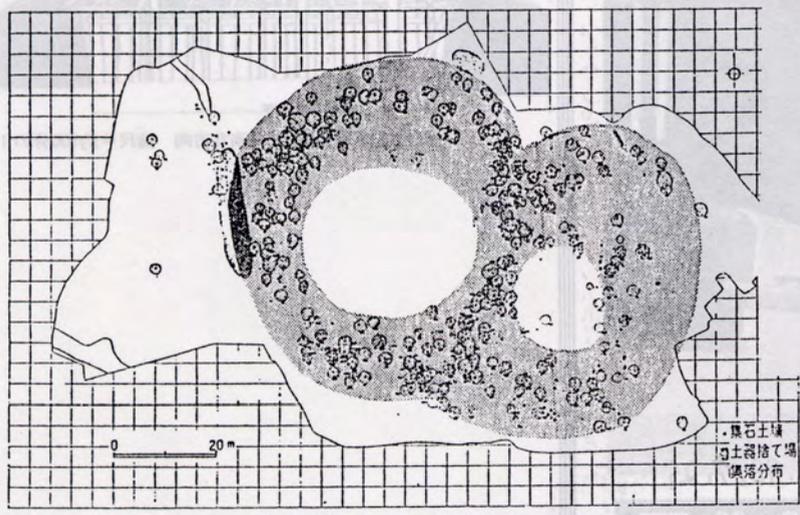
新石器時代の  
遺跡



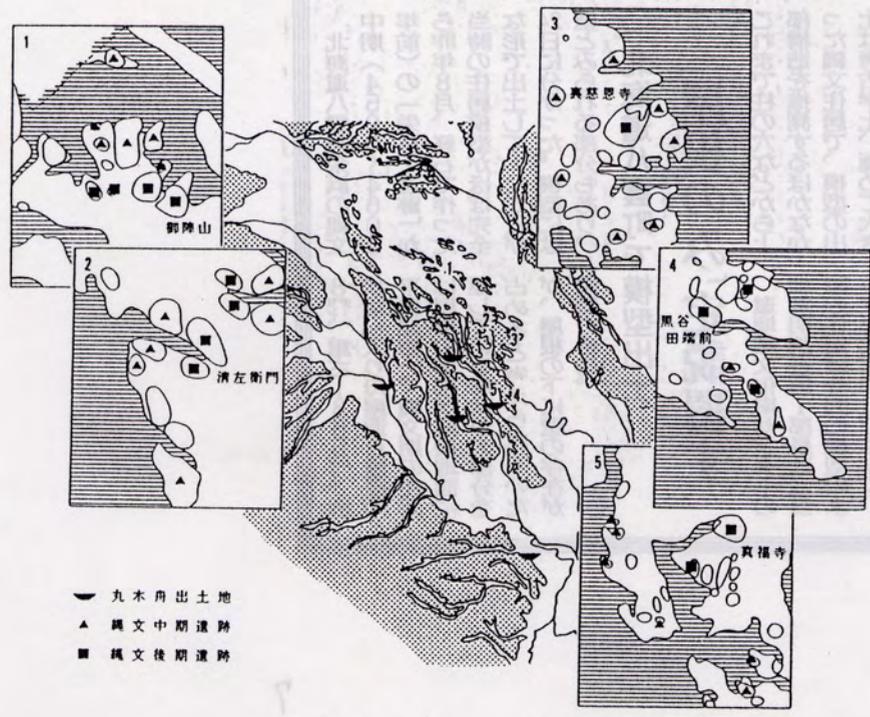
ス-1(遺跡)の断面図



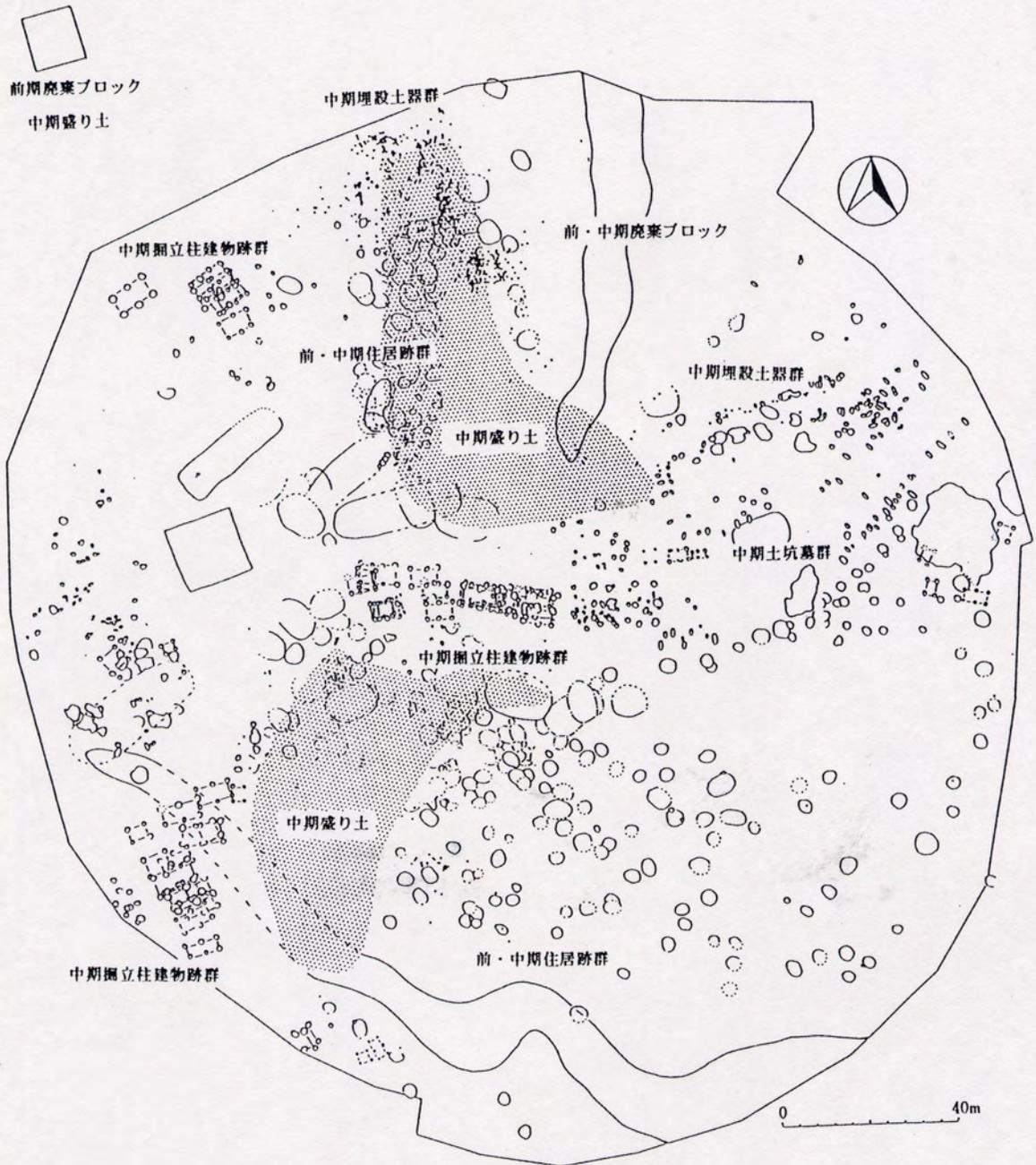
西田遺跡遺構全体図(註11)『岩手の遺跡』より



集落分布図(嵐山町 行司免遺跡)



中・後期の遺跡立地と丸木舟の出土地



三内丸山遺跡 遺構配置図